

## 『籬の木』朝比奈美子



令和2年12月 飯塚書店刊

令和二年五月末、九十八歳の義母が特養に入り、介護の任を解かれた私は一時的に虚無の状態に陥りました。その時ふと心をよぎったのが歌集出版だったのです。

本歌集は第四歌集です。歌を始めました二十代の頃から、いずれ一冊、自分の歌集をという憧れのような思いはありましたが、六十代前半で四冊目の歌集を上梓できるとは思ってもおりませんでした。何か目に見えないものに後押しされてできたことしか思えません。

私は自分がかなりいびつな人間であることを知っています。性格の中に何かくねくねした口籠もるような部分があるのです。そして何よりもそうした自分の内面を人前にさらすことを極度に恐れる臆病な人間でした。歌はそんな私に大きな安らぎを与えてくれました。

歌集出版は私にとって八割までが自励の行為です。でも自励のためだけに何冊も歌集を編むのでは少し寂しい気がします。もう腹を括りました。命ある限り詠い続けようと思います。

## ——歌集の著者から——

## 『金剛葛城山麓日誌』米田郁夫



令和3年1月 本阿弥書店刊

私は奈良盆地南西部にある金剛山・葛城山の麓に広がる葛城の地で育ち、今も父祖伝来の田畑を耕している。

短歌は若いころ少し詠んでいたが事情で中断。定年後の二〇一〇年、宮里信輝氏から再入会を勧められ、歌集の選もしていただいた。また、鈴木竹志氏からは「灯船」への誘いと歌集を出すようにとの言葉をいただいた。出版後は風間博夫氏、松尾祥子氏から批評文を、奈良支部全員の十八名の方々からは作品評を寄せていただいた。一方、大野英子氏はブログ「南の魚座福岡短歌日乗」で本書を丁寧に紹介してくださった。そして思いがけなかったことは、本阿弥書店の「歌壇」で、第十九回筑紫歌壇賞候補歌集にノミネートされたこと。これはこの上ない喜びとなった。

歌は思いの結実。しかも、その「思い」は直叙よりも景物などに重ね描く、つまり具象化という過程の通過によって昇華され、〈歌〉になるのだ、ということを実感した。これも歌集作成を通しての貴重な収穫だった。

## 『天空のかすみ草』 渡辺南央子



令和3年2月 角川書店刊

第二歌集『天空のかすみ草』を上梓してから、この二月で早や二年になる。海外と日本を跨いだ子育てが一段落して帰国したと同時に東日本大震災に遭遇。やつと歌集編纂に着手できたのは帰国十年目直前の秋だった。

「時間」とは当たり前だがこの世のみの概念である。

色も音も匂いもないその概念に支配され人は一生を終える。その時間とはいかなれば砂山の砂のようなものではないかと思う。その砂に座ってさらさらと砂が崩れていく様に時間はすぎ人は一生を終える。砂の粒がもし言の葉の一粒だとしたらその途方もない数を紡いできたのが「歌」なのではないか。その膨大な言葉の積み上げがなかったら、一生は砂のように崩れてしまう。少なくとも歌と言う言葉を遺せた。生きてきた時間を大切に詠んできた安堵が心から沸いた。そして令和四年度の「日本歌人クラブ北関東ブロック賞」と「茨城県歌人協会賞」をダブルで頂ける幸運に恵まれた。もう少し生きて日々の想いを自在に、自由に詠んでいきたいと思っている。

## ——歌集の著者から——

## 『草の輪舞曲』 小野はつね



令和3年2月 柘書房刊

『草の輪舞曲』はコスモス入会二十年目に上梓した私の第一歌集です。先輩方から幾度となく歌集出版を勧めて頂きながら私には遠い世界のことと呑気に過ごしておりました。けれど六年前、さらに四年前にも病を得、二度の手術を経験したことが出版への決意となりました。多くの方々のお力添えを頂きようやく出版できたことに安堵を覚えると同時に楽しみに待っていて下さった先輩方の中にはすでに鬼籍に入られた方もありその事が心より悔まれました。出版をためらっておられる方にはどうか躊躇なく、と申し上げたいです。

今は空家になっている実家の庭に毎年青いヒヤシンスが咲きます。命をつないで咲き続ける花を繰り返して詠み何首かを歌集に入れました。同じ対象を詠みながらその折々に異なる私の心の在り処を歌は思い出させてくれます。短歌という詩形に出会えたことをあらためて幸運に思います。歌を通して出会った皆様のおかげでこの歌集が成りました。感謝の気持ちでいっぱいです。